

---

# 色彩八唄 いろはうた

黒崎メグ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

色彩八唄 いろはうた

### 【Nコード】

N4330S

### 【作者名】

黒崎メグ

### 【あらすじ】

僕の思い人・桃は、「可愛い少女」と「紅の鬼」という二面性を持っている。

ごく普通の少女として生活している彼女は、実は「鬼」であるのだ。彼女の正体を知った縁で彼女達の隠れ家「喫茶浮雲」に出入りするようになった僕は、そこでさまざまな事情を抱えた人々と出会っていくことになる。鬼の少女・桃と僕の不思議な日常を綴った物語。

## 始まりは日記

僕には日課がある。それは日記を書くことだ。その習慣は、僕の人生を変えてくれた恩人に出会った時から始まっている。あれは小学六年生の冬頃だったから、今年でちょうど二年目に入るところだ。あの頃と比べると、僕を取り巻く環境は大分様変わりしている。中学校にあがって、友達が増えたと、以前より良く笑うようになった。

小学校時代の僕はあまり笑わなかった、と思う。あの頃の僕は、自分の家の環境に飽き飽きしていたのだ。学校でクラスメイトが休日両親と出掛けた話を聞くと、自然と唇に力が加わり、眉間に皺が寄った。僕の両親は、共働きで、互いに会社でも重要な仕事に就いているため、仕事にかまけて休日も仕事に家にいらないことが多かった。平日も大概、夜は日付が変わるような時間に帰ってくるが多かったし、朝も僕が学校に行く頃にはもう家を出ているのである。両親のその行動に不安を感じても、僕にはそれを止める術はなかった。だからこそ、小学校の頃は友達の話に加わるのは、なかなか難しかった。

だが、今はそんなことはない。あの冬の日に出会った恩人が教えてくれたことを実践したからだ。

そもそも、僕の日課の日記は、始めのうちは少し違った様式を取っていた。その様式とは交換日記だ。今は僕だけが見る個人的な日記を書いているが、中学にあがるまでの数ヶ月間、僕は恩人の勧めに従って両親と交換日記を行ったのである。交換日記と言っても、何の変哲もないノートに、その日あった出来事を書き込んで、リビングのテーブルの上に放置しただけである。始めのうちは何の反応も示さなかった両親も、おそらく、僕が寝静まった後に、ノートの

中身をチェックしていたのだろう。時々、ノートに走り書きが書きくわえられていることがあったし、家で顔を合わせるがあれば、日記に書いた出来事のことを話題に出してくるようになった。そして、会話が習慣化し、数か月で、日記なしでも両親との会話数が増えたのである。

だからこそ、そのアイディアをくれた彼女を、大袈裟かもしれないが、僕は恩人だと思っている。

その恩人　紅野桃こうのももは、出身小学校は違うが、同じ中学校に通っている。しかも、同じ学年、同じクラスだ。出会った時の口ぶりから、僕はてつきり年上かと思っていたから、入学式で再会した時は心底驚いたのを覚えている。

だが、黒髪をポニーテールにした彼女は、二重の大きな目をしていて、化粧気のない顔には幼さが残っている。そして、彼女が友達と話している姿を目にすれば、まあ確かに自分と同じ歳であることにも納得がいった。彼女は、普通の中学生がするように、昨晚のテレビ番組の話をしたり、コンビ二に並んだ新作のお菓子の話したりする。その姿は、あの時、僕に話してくれた口調とは大違いであったが、どちらも正しく彼女の声なのだ。

彼女には二面性がある。出会った頃と学校での彼女の姿を見比べて、僕はそう思う。そして、そのことを学校では僕だけが知っている。それが誇らしくあるし、同時にそのことを隠そうとする彼女の行為がもどかしかった。どっちも彼女であるが、僕は出会った頃の彼女の姿が好きだった。彼女が隠そうとする彼女の姿が好きなのだ。それを言葉にしたことはないが、おそらく彼女もそれを察している。中学にあがり、再会から数日たったある日、彼女は時間を見つけて僕に問い掛けた。

「私が怖くないの？」

僕は、彼女の言葉の意味が一瞬わからなかった。確かに、彼女の姿は出会った頃とは似ても似つかない。出会った頃の彼女は、言うては何だが、見る者が見れば眉を顰めたくなくなるような恐ろしい姿を

していた。まるで、昔話に出てくる鬼のように頭には角が生えていて、セロハンの膜を通したように、彼女の肌は赤く見えたのだ。けれど、僕は彼女がとても優しいことを知っている。その証拠に、僕が初めて書いた日記には、『泣いた赤鬼は優しかった』という一文が残っている。両親は、きっと読書感想文だと勘違いしただろうが、それは読書感想文などではないのだ。

だからこそ、僕は彼女のその言葉に首を横に振った。彼女は、どこか戸惑いがちに微笑んだが、それでも嬉しそうだった。

その日から、僕は学校ではそれほど関わりを持たないまでも、赤鬼の彼女とは行動を共にすることになったのである。

僕の日記には、今日も赤鬼との日々が綴られている。

## 始まりは日記（後書き）

「colors」の設定の改訂版です。  
設定だけ引き継ぎでほぼ別物。不定期更新です。

## こころ映すは赤【1】

「亮、今日もうちで桃と待ち合わせか？」

いつものように雑居ビルの階段を下り、店のドアを開けると、中から待ち構えていたように馴染みの声があった。遠慮がちに俯いていた視線をあげれば、癖の強い茶髪を襟足で括り上げた店主が、ドアを背にして店の奥のカウンターに立っている。彼の肩越しに上り立つ湯気と僅かに酸味の効いた香ばしい香りから、ちよつど珈琲をいれていたところだったのだらう。

背中を向けたままでなぜ僕だとわかったのか、という疑問が浮かび、だが、彼は桃の遠縁にあたるといふのだということを出し、それなら、聞いても無駄と言ふものだ。こういふときは深く追求しないに限る。僕はその疑問を飲み込み、カウンターに足を向けた。

木製のカウンターのの前には揃いの椅子が並んでいる。それらは力ウンターの高さに合わせて足の長い作りになっているから、僕はつま先立ちでようやく椅子に腰かけた。すると、その様子は見えていないはずの店主からは笑いを堪えたような声上がる。僕はむつとして、意趣返しを込めて、そこでようやく先程の問いに対して口を開いた。

「相変わらず、ここは客が少ないから都合がいいんだよ」

喫茶浮雲　それがこの店の名である。酸味の効いた珈琲の香りと静かに流れるクラシック音楽で満ちた店内は、暖色を帯びた照明で統一されており、革ばりのソファと木目調のテーブルが心地よい空間を作り出している。カウンター席とテーブル席を合わせれば、二十人くらいが入れるか入れないかの小さな店だ。駅と繁華街との中間点に位置しており、店の雰囲気と、何より目の前の店主の容貌を考えれば若い女性で賑わっていても可笑しくないような店である。しかし、如何せん雑居ビルの地下に存在していることから、その存在を知る者は少ない。居たとしてもこの辺りを職場にしているサラ

リーマンか、常連と言えるような年配客といったところだろう。従って、学校の奴らに見つかる心配はなく、桃と落ち合うのは決まってこの喫茶店であった。

だが、この店の店主、司さんはその事実を認めたくないらしく、顔をこちらに向け不機嫌そうに眉を寄せた。

「おいおい、そんな言葉がよく俺の前で言えたもんだな」

「と言っても、司さんは桃に甘いだろ？ そんな理由で店を自由に使わせてくれるくらいには」

「……ったく、言うようになったじゃないか。まあ、あいつは大切な妹みたいなもんだからな」

「へえ、妹ねえ」

「なんだ、羨ましいのか？」

僕は一人っ子だから、羨ましくないと言えば嘘になるだろう。しかしそれ以前に、そんなことをさらりと言ってしまえる彼らの温かさに僕は憧れを抱いてしまう。きっと司さんは血の繋がりを抜きにしても、懐に入れたものに対してはその言葉を戸惑うことなく口にするだろう。そしてそれは、桃にも言えることだ。それが、彼らにとって当たり前のことなのだ。

そういう考えに行きついて、僕はやるせなくなかって、

「あー」

と言葉にならない声を出し、カウンターにおでこから突っ伏した。頭上では司さんが驚く気配がして、僕の気持ちはちよっぴり浮上する。しかし、司さんが発した言葉に、僕は瞬時に飛び起きた。

「まだまだ子供だな」

「誰が子供だつて！」

「そうやってすぐにむきになるところがまさにそうだろ。でも、まあ、俺はお前に感謝してるんだけどな」

「感謝？」

「ああ、桃の初めての仕事相手がお前のような奴でよかったって」

「それは……」



むしろ僕の方が感謝するべきところだ。彼女に出会ったからこそ今の僕がある。彼女らの血族がそれを仕事にしていようと、それは変わることのない真実だ。だからこそ僕は今もこうして彼女と共にあることを選らんでいる。

僕が彼女に投げかける言葉で、彼女が少しでも元気になるように。彼女からもらったこの色彩豊かな世界を少しでも楽しめるように。

その思いが顔に出ていたのだろうか、司さんは僕を見て、

「俺から言うのもなんだが、あいつのことよろしく頼むぞ」と言った。

僕が迷うことなく頷けば、司さんは満足そうに笑う。そして、

「遅かったな、桃」

と声を投げかけたのは店の入り口だった。つられて僕が目をやれば、そこには、制服に身を包んだ桃と黒いランドセルを担いだ見慣れない男の子が手を繋いで立っていた。

## こころ映すは赤【2】

今の会話を聞かれてしまっただろうか。僕は気恥ずかしさに頬が熱くなるのを感じた。だが、彼女はそれを気にした様子もなく、少年の手を引いて店の奥へと入ってくる。そして彼女は、息を整えて口を開いた。

「遅れてごめん。学校出る時に祥子がいたから、気付かれないように遠回りしてきたんだよ」

桃の口の動きに合わせて、胸元の赤いリボンタイが揺れる。よく見れば、衣替えを終えてからそう間も経っていない季節だというのに、白いブラウスの襟元にはほんのりと汗さえ滲んでいる。おそらく、今まで外にいた証拠だろうと、僕は少し安心した。この分だと先程の会話は聞かれていないだろう。

だが、その心配がとけた今、僕が何より一番気になることは、彼女の手を握って離さない少年のことである。

身長からいって、少なくとも小学校四、五年生といったところだろうか。加えて、カーゴパンツと安全ピンで名札の付けられたTシャツ、そして黒いランドセル。服装だけを取ってみれば、どこにもいる小学生のように見える。だが表情を見れば、少し大き目のサングラスが顔の三分の一を覆うようにそれを隠している。

小学校を卒業してからは、特に小学生との関わりを持つことはなかったが、数年で通学にサングラスを掛ける生徒まで出てきたのだろうか。今では小学生との関わりは、近所の年下の子供や友達の弟、妹が精々だから僕には何とも確認のしようがなかった。

けれど、この喫茶店ひみつきちへなぜそんな小学生を連れて来たのだろうか。僕はふと疑問に思い、だが、理由は限られてくるのではないだろうかと考え直す。そう例えば、以前僕も目にした光景が、少年にも見えたとしたらどうだろう。

その憶測に基づいて、僕は、

「なあ、紅野さん、一つ聞いてもいいですか？」

と、かしこまった口調で問い掛けた。

「何？」

「その子供、どうしたんだ」

「……回り道した途中で見つけたんだよ」

犬や猫を見つけたみたいに軽く言うが、それではいまいち答えになっていない。

僕は一つ溜息を吐く。

「そうじゃなくて僕は、どうしてそいつをここに連れて来たのか、って理由を聞いてるんだ」

「うん、だってこの子私のこと見て逃げたから」

「逃げた？」

ということは、やはり僕の推測通り、彼は彼女の異形の姿を目にする条件を持ち合わせていたことになる。

しかし、そうすると、なぜ彼は大人しく桃の後について来たのだろうか。僕が彼女のその姿を見た時は、僕の方から話し掛けたから問題なかっただろう。だが逃げたということは、少年が一度はその姿に恐怖を抱いたことになる。それでも今の彼の様子からは、その恐怖が窺えなかった。彼は一頻り店内を見渡した後、空いた方の手でずり落ちそうになるサングラスを抑えて、少し高い位置にある桃の顔を見上げていた。

「うん、逃げたところをすんでのところで捕まえて、慌てて持ったサングラスを付けさせたんだよ」

なるほど、少年がつけている大き目のサングラスは桃が掛けさせたものなのか。けれど、サングラスと少年の落ち着きとがどう関係しているのかはわからない。桃の言葉の意味するところを考えあぐねて、司さんに助けを求める視線をやると、彼は苦笑を浮かて、

「なあ、亮、お前、眩しい時ってどうする？」

と言った。それが何の意味を持つのか桃の言葉以上に謎であったが、取り敢えず僕は無難な答えを返す。

「目をつぶったり、光を遮ってみたりですね」

「まあ、それと同じってこった」

「いや、全然説明になってないんですが」

「お前も？鬼？が強い色を纏っているのは知ってるだろ」

僕はこくりと頷く。同じ言葉を、確かに以前桃から聞いたことがある。その時受けた説明によると、色というのは一種の『気』なのだそうだ。もちろん、鬼に限らず人もまたそれらを纏っている。だが、絶対的な量は鬼が最も多く、彼女が異形の姿に見えるのは僕らが纏う気が乱れた結果、鬼の強い気を変な方向に屈折させたり反射させたりするからだそうだった。その一連の内容を思い出して、僕はなんとなく彼の説明したいことがわかったような気がした。

それが正しいのだとすると、サングラスは

「入ってくる色の絶対量を減らせば、少しはそれらによる現象を軽減できるってことですか？」

「そういうこつたな。まあ、それができるのは、まだ軽度な相手だけなんだが」

そうか、道理でこれまで度々桃の仕事に立ちあっていたが、一度としてサングラスを使ったところを見たことがなかったわけだ。

だが、いくら軽度と言っても、

「そいつが欠落者だつてことに変わりはないよな」

僕が思わず口にした言葉に、少年はびくんっと肩を震わせて、桃の背に隠れてしまった。

### こころ映すは赤【3】

それを見て、すかさず桃からお叱りが飛ぶ。

「亮、怖がらせちゃだめでしょ。だいたい、亮だって昔は欠落者だったんだから人のことは言えないよ」

「そういう意味で言ったんじゃないって。それに、怖がらせたっていうなら桃の方が妥当じゃないか？」

「私、この子とは小学校時代、課外活動のグループで面識があるもの。普通の姿なら怖がられることなんてはないよ」

僕がその言葉に縮めると、桃は後を向いて、少年の視線に合わせてるようにしゃがんでやった。

「ごめんね、拓君<sup>たく</sup>。亮も悪気があったわけじゃないんだ」

桃がそう言うと、少年があからさまにほっとしたのが見て取れた。その様子から、面識があるのは嘘ではないらしい。そして、彼はようやくその重たい口を開き、

「あの、けつらくしゃってなんですか？」

と声変わりを終えていない高い声を発した。その問いに桃は目を瞬かせて、彼の胸を指差してやる。

「心のどこかに穴が開いちゃった人のことを私たちはそう呼んでるの」

「心？」

すると、少年は自分の胸に手を当てた。その行為には僕にも覚えがある。それは、桃が僕を欠落者と称した時のことだ。

桃の異形の姿が見えるのは、纏う色が乱れた者だけだ。そして、その原因となるものこそが心である。そうして心の一部を失くしてしまった者を桃達は欠落者と呼んでいるのだ。僕もまた、あの頃、心の一部を見失っていたといえる。だから、少年は昔の僕自身でもあり、彼の気持ちを一番わかってやれるのは僕だろう。先程の言葉もそう思ったが故のものだった。だがあれでどうやら僕はすっかり、

少年に怖がられてしまったらしい。二人が会話しているうちに椅子から降りて近付くと、サングラス越しに少年の瞳が揺れたのがわかった。

「なあ、拓だっけ？ お前、ここに来る前、桃と会った時に何を考えてた？」

僕の問いに拓は、お伺いを立てるように桃を見た。桃がそれに頷いてやってやつと口を開く。

「……友達のこと」  
「学校の同級生？」

拓の答えをさらに促すように桃が問い掛ける。それに対して、拓は困ったように唇を噛んだ。

「なんだ、違うのか？」  
「この間まではクラスメイトだったんだ。でも今はもう居なくなっちゃった」

悲しみに耐えるようにしぼり出した言葉から僕が思い浮かべたのは、最悪の出来事であった。

おそらく、拓の友達は亡くなってしまったのだろう。僕は、どうやら不味いことを聞いてしまったようだ。言葉を発したきり、俯いてしまった拓に掛ける言葉が見つからない。そんな僕をしりめに桃は、  
「その子とはとても仲良しだったんだね」

と言った。少年は俯いたまま、  
「小学校に入る前からの仲良しだったんだ」と返す。

「幼馴染？」  
「うん。家が近所で、昔っからずっと一緒に遊んでた。親友と呼べる奴だったんだ」

「でも、どうしてその子は居なくなっちゃったの？」  
「そんなに直球でよいのか」と、僕はその質問に息を呑んだ。しかし、桃にも考えがあるのだろう。そうでなければ、彼女が相手を傷つけるようなことを口にするはずがない。妙な確信が僕の中にあ

る。

そして、彼女の言葉が拓にどう伝わったかは知れないが、それを聞き、拓は驚いたように顔を上げた。サングラス越しの瞳に目を凝らせば、悲しみに混じって、怒りが鋭く熱を帯びている。

先程の僕の発言も含め、彼を怒らせてしまったようだ。だが僕はその予想に反して、拓の怒りは僕らに向けられたものではなかったのである。

## こころ映すは赤【4】

「あいつ、親の転勤のこと黙ってて、その上、お別れも言わずに行っちゃったんだ！」

拓は一息に言い切つて、口を真一文字に結んだ。

拓の怒りは、僕らに向けられる以前にその友達へと向けられているのだ。だが、拓の言葉から読み取れた事実には、僕はどつと力が抜けるのを感じた。

「なんだ、死に別れたわけじゃないのか……」

僕らの歳で死を間近で見る機会なんて限られている。命という物を学ばせようと近頃の学校では小動物を飼ったりもしているようだ。けれど、如何せん人の死というものに向き合う機会は小学生では無いに等しい。あつたとしてもそれは歳の離れた祖父母である事が常だ。

僕は彼が人の死に直面しなかったことに安堵した。だがそこで新たな疑問が浮かんでくる。単なる友人との別れが、色の欠落の原因となり得るのだろうか。

その疑問の答えであるかのように、僕の眩きを聞いた桃は、

「でも、拓君にとつては悲しみの重みに違いはないよ。別れを言ってもらえなかったのなら尚更」

と言った。

僕が瞬きを返す横で、拓は唇にさらに力を加えた。今にも泣き出しそうなほど眉間に皺を寄せ、唇を噛みことで涙を堪えているようでもあった。

それは桃の言葉を肯定しているも当然の反応だった。大方、別れの日のことを思い出して悲しくなったのだろう。

今更ながら自分が先程言った言葉を後悔して、それでも掛ける言葉が見つからずに、僕は口ごもるように呟く。

「おい、泣くなよ……」



「泣いてなんかない！」

拓の目尻には涙が浮かんでいて、強がっているのは明らかだった。その一連のやりとりを見た桃は、呆れたように溜め息をつく。

「そんな言葉じゃ、慰めにもならないよ」

「じゃあ、桃には拓の憂いを払うために何か考えでもあるのか？」

僕の問いに桃は肩を竦めてみせた。

「昔、亮を助けてあげたのは誰だと思っているの？」

桃が返した問い掛けの意図するところがわからずに、僕は僅かな間をおいて、「……もちろん、桃だろ」と答えを口にした。

それに桃は満足そうに笑う。

「そう。だから亮もわかっているはずでしょ」

彼女との出会いと日記帳のことを思い出して、僕は内心ほっとした。彼女に任せておけばきつと大丈夫だろう。

僕から視線を移した彼女は拓の肩に手を添え、

「ねえ、一つ提案があるんだけど……」

と言って、拓の耳元に顔を近づけて何かを囁いた。

こころ映すは赤【4】（後書き）

間があいたため『僕』の口調に違和感があるかもしれませんが、お気づきの際はご指摘ください。

## こころ映すは赤【5】

それを聞いた拓は、

「そんな簡単なことでいいの？」

と、桃を見上げ目を瞬かせる。

桃は笑って、「きつとうまくいくよ」と胸を張った。その自信がどこからくるものかわからなかったが、僕が先程安心感を覚えたように、拓もその言葉に元気づけられたのだろう。

「わかった。やってみる」

と力強く頷き、サングラスを掛けたまま踵を返した。その後ろ姿に桃は「頑張つてね」と手を振る。小さな背中が店の中から姿を消した頃、桃の足はようやくカウンターへと向いた。僕は慌ててその後を追う。

「おい、桃、あいつに何を言ったんだ？」

桃はカウンター席に腰を落ち着けると、椅子をくるりと回転させて、後に続いた僕を見やった。

「亮もきつと知ってることだよ」

「僕の知ってる？」

意味がわからず首を傾げた僕を無視して、桃は司さんが出したアイスココアを美味しそうに飲み始める。

結局その日は、それきり目立った出来事は起きなかった。

しかし一週間ほど経ったある日、僕がその出来事を忘れ掛けたところに、思いがけずその来訪者はやって来た。その日、僕が桃と連れ立って浮雲の扉をくぐると、カウンターに小さな背中があったのである。

「拓君？」

桃の呟きが耳をかすめる。僕が背中の主を認識すると同時に、

「お姉さん！」

カウンターでココアを飲んでいた拓が、こちらに気付いて振り返

る。僕が眉を寄せた横で、桃は笑って手を振った。

「拓君、久しぶりだね」

その言葉に拓は、満面の笑顔を返す。先日泣きそうな、苦しそうな顔とは正反対だ。何よりサングラスを掛けていないことから、彼の失った色が戻って来たことを窺い知ることができた。

拓は隣の椅子に置いてあったランドセルから、桃から借りっぱなしだったサングラスとピンク色の可愛い花柄のあしらわれた封筒を取り出して、ぴよんと椅子から飛び降りた。駆け足に僕らのもとにやってくると、桃にその二つを差し出した。

「うまくいったの？」

「うん。だから、お姉さんにも読んで欲しくて」

にかつと歯を見せて笑う姿は、子供らしく可愛らしい。だがその仕草を素直に受け入れられない自分がいた。

「まさか、ラブレターじゃないよな」

小学生がやることだからと割り切るうとする一方で、桃へのラブレターである可能性にどうにも声音が低くなる。サングラスを靴に仕舞い、その手紙を受け取った桃はその内容に目を通しながら呟いた。

「うーん、ある意味そうかもね」

その返答に僕はうろたえる。その動揺があまりにも顔に出ているのか、僕の表情を見た桃は苦笑を浮かべた。

「言うておくけど、私宛てじゃないよ。これは拓君の幼馴染が拓君への気持ちを綴った大事な手紙なんだよ」

「ってことは、この間言ってた幼馴染って女の子だったのか？」

僕の疑問に拓が頷く。

「ずっと、ずっと一緒に大切な奴だったんだ。だからあの日お姉さんに言われた、こころはね、言わなくちゃ伝わらないものなんだよ、って言葉で決心がついた。先生に引越し先の住所を聞いて、あいつに手紙を書いたんだ。そしたら昨日返事が来た。あいつ、お別れを言うのが悲しくてずっと黙っていたんだって。一生懸命謝られた。

でもあいつも俺と同じ気持ちだったんだって知ってとても嬉しかったんだ」

拓はそこで一旦言葉を区切り、桃に目をやった。桃は手紙に優しい眼差しを落としている。桃はどうかやらこちらの遣り取りよりも手紙に気がいつているようだ。拓はそれを確認して、僕のシャツの袖を引いた。それに釣られて僕が身を屈めると、拓は声を響めて、

「お兄さんも言葉にしないと伝わらないこと、あるんじゃないの？」と囁いた。その視線の先はしっかりと、桃へと向いている。

「余計な御世話だ！」

僕は拓へ思いつきりデコピンをお見舞いしてやった。

こころ映すは赤（完）

## こころ映すは赤【5】（後書き）

ご意見、ご感想はお気軽にどうぞ。

今回は青編です。題は「見つけたのは青」を予定しています。

## 見つけたのは青【1】

拓が浮雲に出入りするようになってから、あっという間に数カ月が過ぎた。

その間に学校は夏休みに入り、夏の暑さは盛りを迎えている。両親は仕事に出掛け家には僕一人しかないので、浮雲へ行って自分の宿題の片手間に拓の勉強をみてやるのが日課になりつつあった。

僕はその日も気温の上がりきらないうちにと、店の開店に合わせ、午前中に家を出た。それでも今日の日差しは強く肌をじりじりと焼いてくる。建物が作り出す陰迎るようにして駅に向かった僕は、電車に乗ってやっとひと心地つくことができた。夏休みということもあり座席は全て埋まっていたが、目的の駅はそう遠くないので、そのまま手すりに身を預ける。駅に着けばまた歩くことになる。駅から浮雲までは徒歩で十分程度。決して長くない道のりだが、日差しの強さを考えると億劫な距離だ。それまでに少しでも休みたい。だがその思いも空しく、アナウンスは十五分程で目的地を告げる。駅のプラットフォームに降り立った僕は、車内とは対照的なその熱気に溜息を吐いた。渋々歩き出すと、すぐに汗がじんわりと滲んでくる。僕がその行程を歩き終えた頃には、身に付けたTシャツの背に汗が染みを作っていた。

それでも地下に降りる階段に足を踏み入れると、そこには僅かに湿気を帯びた涼しさがある。ひたりひたりとその涼しさを踏みしめるように地下へと下りて行く。

店のドアに手を掛けそれを開けると、中からはさらに冷たい空気が流れだした。店内はしっかりと冷房が利いていることを確認して僕はほっとした。

その様子にカウンターにいた司さんは苦笑を浮かべる。

「まだ午前中だっていうのにへばってるのか？」

「午前中っていいですけど、今日の日差しは半端ないですよ」

シャツの胸元を掴んでぱたぱたと空気を送り込みながら、僕は真っ直ぐにカウンターへ向かう。

「そうか。でもまあ、その方がこっちとしては店が繁盛してありがたいが」

司さんは言葉を返しながら、カウンターの上に氷水の入ったグラスを置く。僕はそれを受け取り喉を潤してから、

「暑いと繁盛するんですか？」  
と尋ねた。

「暑いと喉が渴くだろ。空調が効いてる上に、ドリンクを飲みながらゆっくりできるからな。亮だつて、ここを避暑地にしてるだろ？」

確かにそうかもしれない。

僕は苦笑を浮かべ、誤魔化すように視線をそらした。そのまま店内を確認するように視線を巡らせる。ここに拓でもいれば、肩身の狭い思いはしなくて済んだだろうが、残念なことに拓の姿は見当たらない。店内はまだ誰の姿もなく、代わりに僕の目を捉えたのは壁にもたせ掛からせるようにして置かれたキャンパスだった。

大きさは一メートルちよつと　小学校高学年の背丈ほどはありそつだ。何を描いたものかはわからないが、キャンパスの表面は青系の絵の具で何重にも覆われている。額に入っていないことから、店の飾りではないことだけは憶測することができた。

「司さん、あの絵は？」

「ああ、あれか。昨日、静しずかが置いてったんだよ」

「しずか？」

僕が首を傾げたと同時に、店のドアが開く気配がした。



## 見つけたのは青【2】

僕らが目を向けると、現れた人影は二つ。

一人は僕にも見覚えがある。藍染の甚平に日よけの麦藁帽子、帽子の下から覗くのは皺の刻まれた優しい目元だ。年の頃は七十歳前後といったその老人は、この喫茶店で何度か言葉を交わしたことがある常連客だった。そして見覚えのないもう一人は、彼の腕に手を沿え、細長い杖で床を叩きながら歩く女の子である。彼女はジーンズにスニーカーというなんとも簡素な出で立ちで、街でよく目にする同年代の女の子達が持ち合わせる雰囲気とは全く違っていった。だが甚平姿の老人と並ぶとひどく目立つ。老人の年齢から考えるとおそらく孫だろう。学校で見かけたことがないから、他の中学に通っているか、もしかしたら高校生であるのかもしれない。彼女が司さんのいう静だという可能性だつてある。

僕が彼らの動きに注意を払っているのも気付かずに、老人は空いた方の手で日よけの帽子を脱ぎ、彼女をテーブル席へと促した。

「段差があるから足元に気をつけなさい」

「大丈夫よ。おじいちゃんは心配性ね」

彼女は手にした杖で床を叩く。コツコツとまるでヒールの音のように軽快な音をたて歩く彼女は、老人が引いた椅子にゆったりと腰を下ろした。

それを見届けた司さんは、冷水の入ったグラスを盆に乗せ、メニュー表を手にカウンターを出ていく。すると、司さんの動きに気づきこちらを向いた老人と目が合った。

「こんにちは、今日は君も来ていたんだね」

と先に口を開いたのは老人だった。

「こんにちは……」

僕が気恥ずかしさに慌てて頭を下げると、司さんはグラスを置きながらわざとらしくため息をつく。

「亮はここんとこ毎日来てるんですよ」

それを聞いた老人からは笑い声があがる。

「最近どうりでよく遇うと思つたよ」

「困つたことに、態のいい避暑地にされてますよ」

「といつても、君は彼を気に入っているんだらう。君は気に入らない客は平気で追い出すからね」

老人の言葉に僕は思わず身体を震わせた。

司さんはよき相談相手で、一人っ子の僕にとって兄的存在だが、司さんにとってそれが迷惑になつていないという確証はない。もしかしていい加減うんざりして追い出されるのかもしれない。

急に襲つた不安に僕が司さんを見やると、彼は肩を竦めて見せた。

「人聞きの悪いことをおっしゃらないでくださいよ」

「しかし、昨日の夕方に伺つた時には、ここにいる彼ぐらいの年頃の男の子を怒鳴りつけて追い出していたじゃないか」

夕方というと僕が帰つた後だ。昨日は母に遣いを頼まれたため、僕はお昼過ぎで浮雲を後にしていた。僕が帰つた後、一体何があつたというのだろうか。そういえば、あの絵を置いていったという静さんが来たのもその頃ではないだろうか。もしかしたらその静さんに関係していることもあり得る。

そう例えば、あの絵に悪戯したとか。

僕はいろいろと憶測を試みたが、司さんの返答は呆気ないものだった。

「ああ、あいつのことをおっしゃっているのならお角違いですよ。

あいつは客ではないんです」

「客ではない？」

「ええ、遠縁の子供が遊びに来たんですが、仕事の邪魔をするので閉店まで外で遊んでくるように追い出してやつたんです」

「そういうことか。私はつきり、君はあまり若い者を店に入れたがらないものだと思つていたから、それを聞いて安心したよ。折角孫と来たのに、追い出されては敵わんからな」

「おじいちゃん、そんな言い方はいけないわ」

目元の皺を深くして笑い声をあげた老人を少女が窺める。そこで  
ようやく僕らの意識は少女に向いた。

### 見つけたのは青【3】

彼女はその気配を敏感に感じ取り、

「はじめまして、有希と言います。おじいちゃんがいつもお世話になってます」

と頭を下げる。その動作があまりにも自然なものだったから、僕は次に司さんが口にした言葉には驚きを隠せなかった。

「いいえ、こちらこそおじい様には御贔屓にしていたでいます。ですがこんな可愛らしいお孫さんがいらつしやるとわかっていれば、点字のメニュー表を用意しておいたのに、大野さんも水臭い」

「私の自慢の孫だからね、可愛いのは当たり前。メニューについては二度目にぜひお願いするよ」

「待つてください。今、点字って……」

思わず席から立ち上がった僕に三人の顔が一斉に向く。司さんは呆れたように溜め息をつき、老人も困ったような表情をしている。

そして当の少女は焦点の定まっていない目を僕のいる方向に向けて苦笑を浮かべた。

「私、目が見えないのよ」

「……そんなふうには見えなくて。えーと……」

司さんの視線を痛いほど感じて、僕は気まづくなる。普段の生活の中で目が見えないとどうなるか考えて、僕はげんなりした。ゲームをすることもできないし、テレビをみることもできない。僕一人ではこうして浮雲にやってくることもままならないだろう。そして何より、桃をはじめとした大切な人達の顔を見えることができない。それが僕にとっては何より堪えることだ。

「すみません、無神経なこと言って」

彼女の気持ちを考えて、僕は謝罪を口にした。それでも、そんなふうに見えなかったのだから仕方がない。彼女のつく杖は気になつてはいたが、目が見えないにしては彼女の動作はあまりにも自然す

ぎた。

「いいえ、気にしないで。それにそんなふうに見えないというのは、私の頑張りに対する褒め言葉だもの」

「頑張り？」

「そう。目が見えない分、人より他の感覚が敏感になったのよ。それを得るまでたくさん失敗を繰り返してきたけれど、今ではそれが私の目の代わり」

「それって、何気なにげにすごいことじゃないですか！」

思わず興奮で口調が荒くなる。普段僕が見ている世界が彼女にはどんなふうに見えているのだろう。

「有希さんには、この店の中の様子はどんなふうに伝わっているんですか？」

「うーん、そうね。店長さんからはすごく強い光を感じるわね。それにもう一つ、壁際から青い光を感じるのだけれど……」

彼女の言葉に壁際に目を向けると、確かにそこにあるのは先程司さんとの話題に上がった青いキャンバスだ。僕は司さんに断りを入れて、その絵を彼女のもとまで運んだ。

「司さん、絵を有希さんの傍に運んでも構いませんか？」

「ああ」

僕が絵を彼女の前に置くと、彼女はその絵にそつと手を伸ばした。僕は止めるべきか司さんを窺ったが、司さんは首を横に振り、それを容認した。

「やさしい青……」

彼女は何重にも塗り重ねられた絵の具の凹凸に指を沿わせながら、呟きをもらす。何が描いてあるのかわからないそのどこを指して、「やさしい」と表現したのか僕にはわからなかった。だが彼女は確かにそこにやさしさを感じたようだった。

そしてその感性はあながち間違っではなかったらしい。

「あなた、なかなか見る目があるよ」

いつの間にか割って入ったその年若い男の声は、僕には聞き覚え

がないものだった。しかし代わりに司さんが、溜め息交じりに彼の  
名を呼ぶ。

「静っ！」

どつやら噂の静は女ではなく男であったようだ。

## 見つけたのは青【4】

しかし静という男は、名に違わず細身の男であった。歳は確かに僕とそうかわらない。もしかしたら、二、三年上かもしれないといったところだ。茶色に染めた柔らかそうな髪に、日焼けをしていない白い肌、そして黒い瞳を縁取るのはシルバーフレームの眼鏡である。一見していかにも文科系の男であるが、だがその印象に不釣り合いなツナギを身に纏っていた。そのツナギの所々には絵の具が飛び散った跡が見受けられる。

そんな男の行動を僕が計りかねているうちに、彼に声を掛けたのは有希さんである。

「あなたがあの絵の作者ですね」

彼女は見えない目で男を見すえ、知るはずのない事実を口にした。「ああ、その通り」

肯定を耳にしながら僕は、驚きで言葉を失くす。絵の色を言いたるばかりか、男が絵の作者だとその出で立ちも目にせず言い当てることが可能なものだろうか。僕は静が絵を置いていったという話を耳にしているし、その出で立ちも目にしている。だが彼女はもちろんその話を聞いていないはずだし、彼の姿も目に見えていないはずだ。

司さんも驚いているのか言葉がない。彼女の祖父に至っては、こんなこと日常茶飯事なのか、面白そうに事の成り行きを見守っているだけだ。僕はしばしの思案の後、有希さんに問い掛けた。

「どうして彼が絵の作者だとわかったんですか？」

有希さんは僕に目を向け、それこそ逆に問い返したいような仕草で瞬きした。

「どうしてって、絵と同じ色を纏っているからかな……」

「同じ色？」

「うん。彼の纏っているのは優しく、それでいて清んだ綺麗な青」

纏う色　　と言われて僕が真つ先に思い浮かべたのは、鬼のことである。鬼は強い色を纏っている。静という名の男が、司さんの遠縁にあたるなら彼も鬼の血をひく可能性は十分にある。もしその過程が正しかったとしたら、それがわかる彼女はもしかしたら欠落者なのではないだろうか。

「司さん……」

僕は不安げに司さんの名を呼んだ。僕にすら思い至った可能性に、司さんが気づかないはずがない。



見つけたのは青【4】（後書き）

短くて申し訳ありません。

一応、次回で青編は終了の予定です。

ご意見ご感想いただけると嬉しいです。

## 見つけたのは青【5】

司さんは眉間に皺を寄せ、考え込むように顎に手を添えた。

「見えないからこそ、見えるものもあるということか」

それは僕が予期し得なかった言葉だ。その言葉の意味がわからず、僕は首を傾げる。

「どういうことですか？」

「彼女が見ているのは屈折光ゆがんだひかりじゃない。本質そのものということだ」

尚も訳がわからず顔を歪めた僕を見て、静は笑い声をあげる。

「つかぬい司兄、その説明じゃ難しすぎるみたいだぜ？」

静と僕を交互に見て、司さんは本日何度目かになるため息をついた。

「つまり彼女は欠落者じゃない。そもそも彼女が欠落者なら、静の纏う青を優しいと表現するはずがないだろ？」

そう言われてみれば確かに、欠落者ならその纏う色の大きさに恐怖を覚えてもいいはずだ。僕も今でこそ桃を優しい赤鬼と称しているが、彼女に初めて出会った時は、驚きに言葉を失ったものだ。対して有希さんは恐怖の色も浮かべず、驚いた素振りも見せず、平然としていた。司さんの言葉通りならそのことにも納得がいく。

思考を巡らせる僕を余所に、彼女の祖父は目を細めて言葉を発する。

「私の可愛い孫娘が鬼のお世話になるような子のはずありませんよ」

鬼？

「鬼を知っているんですか！」

耳についた言葉に、僕は思わず声を張り上げる。

「知っているも何も、私も昔は？欠落者？だったんだよ。今日は折角だから孫と可愛い赤鬼を会わせたくてね」

可愛い赤鬼というと桃の他に思い当たる節はない。どういうことかと司さんの様子を伺えば、彼は肩を竦めて見せた。

「彼は桃の祖母　つまり、先々代の赤鬼の友人だ」

もしかしてこの人を通じて、僕と桃の関係は桃の祖母に筒抜けなのではないだろうか。嫌な考えに行き当たって、顔から血の気が引いていくのがわかる。この人のいる店内で、拓と桃の話をしていたことも一度や二度ではなかったはずだ。こんなことなら、拓の宿題の面倒なんて見てやるんじゃないか。今頃後悔したところでもう遅い。

「なんだ、なんだ。顔青くして、あんたもしかして桃の知り合いか？」

話の流れで、僕と桃が知り合いであることを感じとったのか、静が話に割り込んでくる。だが僕にその言葉に答えてよいものか迷った。ここで肯定してしまえば、目の前の老人に対しても誤魔化しは利かなくなってしまう。

僕の困惑を余所に、その問いには司さんが答えた。

「彼は桃の初めての仕事相手だ」

ヒューツと静は口笛を吹く。

「なるほど、それで桃のことが好きってわけだ」

鬼は誰しも敏いものなのか、一言で自身の思いを言い当てられて、僕は顔に熱を帯びた。ポーカーフェイスを装おうにも、いきなり過ぎては対処のしようもない。けらけらと顔に似合わない笑い声をあげる静を睨めば、彼は真剣な面持ちになって僕の目を真正面から見詰めた。

「桃を守ってやるのは俺の役目。それは誰にも譲らないよ」

その言葉に僕は息を呑む。

静と桃の関係性はわからないが、彼が口にしたのは牽制ともとれる言葉だった。

## 見つけたのは青【5】（後書き）

青編は別名ライバル登場編。

青編は一応これにて終了になります。

次回から桃が再び登場して話が進んでいくはず……。静が何者かも次話で明らかになっていくと思います。

ご意見、ご感想を残していただけると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4330s/>

---

色彩八唄 いろはうた

2011年11月7日03時24分発行